

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Stylistic Characteristics of Conjunctions in Spoken Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 好葉, SHIBATA, Konoha メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001509

話し言葉における接続詞の文体的特徴について

柴田好葉(立命館大学大学院文学研究科)

Stylistic Characteristics of Conjunctions in Spoken Japanese

Konoha Shibata(Graduate school of Letters, Ritsumeikan University)

要旨

接続詞の文体的特徴に関する研究においては、書き言葉を対象とした調査はいくつかみられるが、話し言葉を対象とした大規模な調査は行われていない。そこで『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)を用いて話し言葉における接続詞の文体的特徴を調査した。CSJに出現した頻度100以上の接続詞の内「で」を除く43語を対象とし、石黒(2008)を参考に意味用法の分類を行った。さらに講演種・自発性・発話スタイルの3項目それぞれを5段階に分け各接続詞に点数を付与し、その合計点数(15点満点)を元に層別した。

その結果、合計点数が13点以上、5点以下、その中間という3つの層に接続詞を分けることができた。層ごとに接続詞の意味用法をみると13点以上の層では偏りがなく多様な意味用法が確認できるのに対し、5点以下の層では順接や逆接の接続詞に偏っていることなどが明らかになった。

以上の結果を具体的な用例を含め考察し、話し言葉における接続詞の文体的特徴を明らかにする。

1. はじめに

接続詞には「しかし」「だが」など、同じような用法で使用されているものがいくつかあるがその使い分けには明確な基準が存在しない。例えば『新明解国語辞典』第七版で「しかし」の項目を見ると「「だが」より少し改まった言い方」と、同じ用法内での使い分けについて記載されているが、その根拠となる数値データや具体的な使用例は明記されておらず、定性的な観点からの記述に留まっている。

また、田中(2001)のように、現代の接続表現について文体的特徴を表にまとめ分析を行っている研究はあるが、調査データが明記されていない筆者の内省による定性的な研究に留まっており、定量的な研究が不十分である。

そこで本稿では接続詞についてCSJを用い、定量的な観点から調査と考察を行うことで各接続詞の文体的特徴について明らかにしていく。まず次の第2節で接続詞について網羅的に調査している先行研究をまとめ、第3節で全体の用例数を示し各調査観点の基準や調査方法の説明を行う。その後に第4節で接続詞全体の調査結果を俯瞰すると共に第5節で具体的な用例の分析を行い、第6節で全体のまとめを行う。

2. 先行研究

各接続詞に関する個別の研究は数多くあるが、網羅的に接続詞の実態調査を行っている研究は少ない。先行研究として国立国語研究所(1955)と石黒(2016)を取り上げる。

国立国語研究所(1955)はテープ式録音器を用いて、延べ83620語の日常の談話を採集し、イントネーション、語・文節・文の長さ、文の構造、語の種類・使用度数・用法など談話についての基本的な問題を探っている。この中で接続詞についても調査が行われている。「井戸端会議」「買い物」などといった様々な日常談話場面のデータから、異なり語数63語、延べ語数1558語の接続詞を抽出し、性別、学歴、年代、類別、使用率という観点から、談話における接続詞について調査・考察を行っている。その結果、談話での接続詞では「それで」「だから」「で」「でも」「だけど」「だって」のような、本来の接続詞の役割である文や語を繋ぐ働きを持たず、ほとんど無意味に置かれているもの、いわゆる遊び言葉・場つなぎ的な用法での使用例が多いことが明らかとなった。

石黒(2016)では商学、経済学、国際政治学、法学、社会学といった社会科学5分野の専門文献をコーパス化し調査を行っている。対象は各分野5～7冊の計29冊の内、総合用例数が200件以上ある接続詞である。ここでは手作業であることを生かした徹底的な全数調査が行われ、論理性重視の基礎分野に接続詞が相対的に多いことなど、書き言葉に関する文体的特徴について指摘している。

以上の先行研究については次のような問題が指摘できる。

- ① 話し言葉の使用実態についての調査を行った研究はあるが、60年前に行われた調査であり、大規模な新しいデータに基づく調査は行われていないため、現代話し言葉の資料を用いた調査が必要である。
- ② 現代語の接続表現についての研究はあるが、書き言葉に関する限られた分野の資料のみを扱った研究であるため、話し言葉に関する多様な分野の資料を用いた研究が必要である。

このように現代の話し言葉における接続詞の文体的特徴を明らかにするためには、大規模で客観的な現代に近い時代の話し言葉に関する資料を用い、幅広い分野での調査が必要であると考えられる。そこで本稿では複数の種類の講演などが収録されているCSJを用いて計量的な実態調査・研究を行い、現代の話し言葉における接続詞の文体的特徴について明らかにしていきたい。

3. 調査方法, 調査資料

第2節での問題意識を踏まえ、現代の大規模な話し言葉コーパスであるCSJを用いて話し言葉における接続詞について網羅的な調査を行い、使用実態を把握して各用法の特徴や使い分けについて明らかにしていく。検索には、全文検索システム『ひまわり』ver.1.5.4を使用し、検索条件は長単位品詞指定を「接続詞」に指定した。

CSJでは短単位と長単位、2つの言語単位を採用している。短単位では「それから」や「ところが」といった接続詞が「それ(代名詞)/から(助詞)」「ところ(名詞)/が(助詞)」と区切られるのに対し、長単位では1語として扱われる。そのため、今回は接続詞の調査に適していると考えられる長単位を使用し検索を行った。

CSJでの検索の結果、誤解析を除く接続詞の全用例数は117410件であった。今回「で」に関しては、幅広い用法で使用され前後文脈だけでは用法の判断が難しい用例が多いため調査対象外とした。CSJでの検索の結果、用例数が100件以上確認された接続詞(「で」を除く)43語の内、学会講演・模擬講演・対話、3つの講演種に出現している用例を調査対象とし石黒(2008)を参考に意味用法の情報を付与した。用例数が100件以上の接続詞を次の表に示す。

表 1: CSJ での検索で用例数が 100 件以上確認された接続詞

接続詞	用例数	接続詞	用例数	接続詞	用例数	接続詞	用例数
で	55447	しかし	1782	それでは	599	しかしながら	221
それから	9244	では	1291	から	549	ということで	218
それで	7822	さらに	1287	または	472	ですので	204
そして	5855	そこで	1215	それでも	472	ちなみに	200
また	5673	ようするに	1176	いっぽう	434	ですが	157
あるいは	3481	ところが	724	したがって	420	ということとは	149
でも	3262	しかも	683	もしくは	414	それとも	138
だから	2706	および	663	さて	289	ですけれど	136
じゃ	2283	だけれど	642	かつ	243	なので	134
ですから	2106	ただし	610	というのは	227	したがいまして	128
ただ	1891	すなわち	603	なお	223	ないし	110

対象の 43 語について各接続詞の講演種・自発性・発話スタイルのデータを元に層別を行った。観点については表 2 のように各項目ごとに 5 段階に分け、それにより 1~5 点の点数を付与した。また、3 つの観点の合計点数(15 点満点)を算出した。講演種では CSJ で付与されている音声のタイプ(講演種などの情報)を使用した。自発性、発話スタイルに関しては CSJ で 5 段階の評定が付けられている単独評定データを使用し配点基準を作成した。単独評定データとは個々の講演の自発性を客観的に評価する目的で講演の現場にいるスタッフ 1 名が評定したデータである。自発性では「1 低い」「2 やや低い」「3 普通」「4 やや高い」「5 高い」といった評定が、発話スタイルでは「1 くだけた」「2 ややくくだけた」「3 普通」「4 ややあらたまった」「5 あらたまった」といった評定が講演ごとに付与されている。

表 2: 各観点の配点基準

基準/観点	講演種	自発性	発話スタイル
配点基準	学会講演・模擬講演の合計の内、学会講演が占める割合	全体に対する自発性評定の4・5の合計値の割合	全体に対する発話スタイル評定の4・5の合計値の割合
1点	0~20%未満	80~100%未満	0~10%未満
2点	20~40%未満	70~80%未満	10~20%未満
3点	40~60%未満	60~70%未満	20~30%未満
4点	60~80%未満	50~60%未満	30~40%未満
5点	80~100%未満	0~50%未満	40~100%未満

学会講演の割合を算出するときは学会講演・模擬講演のみを、自発性と発話スタイルに関しては学会講演・模擬講演・対話の内、評定が付いている全ての接続詞を対象としている。

講演種では学会講演・模擬講演の合計に対し学会講演の割合が高くなるほど、自発性では評定対象の全接続詞に対し評定 4・5 の割合が低くなるほど、発話スタイルでは評定対象の全接続詞に対し評定 4・5 の割合が高くなるほど配点が高くなっている。

配点基準による点数計算の具体的な例として順接の接続詞「から」を挙げる。「から」は学会講演・模擬講演・対話の合計用例数が 533 例であった。その内、対話を除いた学会講演・模擬講演の合計用例数が 524 例あり、その内学会講演は 296 例で計算すると 56.5%となり 3 点が付与される。自発性では評定対象の用例が 532 例あり、その内評定 4 が 168 例、評定 5 が 193 例であった。評定 4・5 の合計は 361 例となり全体の 67.9%を占め、3 点が

付与される。発話スタイルでは評定対象の用例が 486 例あり、その内評定 4 が 80 例、評定 5 が 26 例であった。評定 4・5 の合計は 106 例となり、全体の 21.9%を占めるため 3 点が付与される。それぞれの点数(講演種 3, 自発性 3, 発話スタイル 3)を合算すると合計点数は 9 点となる。

4. 調査結果

4. 1 接続詞の層別

各接続詞の意味用法と用例数、そして第 3 節の基準で各接続詞に付与した各観点の点数を次の表に示し、合計点数の高いものから順に並べた。

表 3：接続詞の層別

接続詞	意味用法	講演種	自発性	発話スタイル	合計	用例数
および	並列	5	5	5	15	663
すなわち	換言	5	5	5	15	603
なお	補足	5	5	5	15	223
いっぽう	対比	5	4	5	14	434
かつ	並列	5	4	5	14	243
さて	転換	4	5	5	14	289
しかし	逆接	4	5	5	14	1782
しかしながら	逆接	5	4	5	14	221
したがって	順接	4	5	5	14	420
それでは	転換	5	4	5	14	452
そこで	転換	5	4	4	13	1215
また	並列	3	5	5	13	5673
さらに	列挙	4	4	4	12	1287
したがいまして	順接	4	3	5	12	128
ただし	補足	4	4	4	12	610
では	転換	4	4	4	12	1291
または	対比	3	4	5	12	472
あるいは	対比	4	2	5	11	3481
そして	並列	3	4	4	11	5855
ですが	逆接	3	4	4	11	157
ないし	対比	4	3	4	11	110
それとも	対比	4	2	4	10	138
から	順接	3	3	3	9	549
ということで	順接	4	2	3	9	218
ところが	逆接	3	2	4	9	724
もしくは	対比	3	2	4	9	414
それから	並列	3	2	3	8	9244
それでは	順接	2	2	4	8	147
ちなみに	補足	2	3	3	8	200
しかも	並列	2	2	3	7	683
ただ	補足	2	2	3	7	1891
ですから	順接	3	1	3	7	2106
ですので	順接	3	1	3	7	204
ということは	補足	3	2	2	7	149
というのは	補足	3	1	3	7	227
ようするに	換言	3	1	2	6	1176
じゃ	転換	2	1	2	5	2283
それで	順接	2	1	2	5	7822
それでも	逆接	1	2	2	5	472
ですけれど	逆接	2	1	2	5	136
でも	逆接	1	2	2	5	3262
なので	順接	1	2	2	5	134
だから	順接	2	1	1	4	2706
だけれど	逆接	1	1	2	4	642

表3をみると、接続詞の合計点数が13点以上、5点以下、その中間という3つの層に分かれる。層ごとに接続詞の意味用法をみると5点以下の層では順接や逆接の接続詞が多く、意味用法が偏っているのに対し、13点以上の層では5点以下の層でみられたような偏りはなく、多様な意味用法が確認できた。中間層を見ていくと、先の傾向と同様に点数が低くなるにつれ、順接や逆接の接続詞が多く出現し、同様に補足の接続詞も点数が低くなるにつれ増加している。また「だけれど」「でも」などの接続助詞起源の接続詞は合計点数が低い層に多く見られた。

4. 2 意味用法ごとの調査結果

表4～10には意味用法ごとに合計点数、用例数が示されている。

表4：順接の接続詞

接続詞	合計	用例数
したがって	14	420
したがいまして	12	128
から	9	549
ということで	9	218
それでは	8	147
ですから	7	2106
ですので	7	204
それで	5	7822
なので	5	134
だから	4	2706

表5：逆接の接続詞

接続詞	合計	用例数
しかし	14	1782
しかしながら	14	221
ですが	11	157
ところが	9	724
でも	5	3262
それでも	5	472
ですけれど	5	136
だけれど	4	642

表6：転換の接続詞表

接続詞	合計	用例数
それでは	14	452
さて	14	289
そこで	13	1215
では	12	1291
じゃ	5	2283

表7：並列の接続詞

接続詞	合計	用例数
および	15	663
かつ	14	243
また	13	5673
そして	11	5855
それから	8	9244
しかも	7	683

表8：対比の接続詞

接続詞	合計	用例数
いっぽう	14	434
または	12	472
あるいは	11	3481
ないし	11	110
それとも	10	138
もしくは	9	414

表9：補足の接続詞

接続詞	合計	用例数
なお	15	223
ただし	12	610
ちなみに	8	200
ただ	7	1891
というのは	7	227
ということは	7	149

表 10：換言・列挙の接続詞

接続詞	合計	用例数
すなわち	15	603
ようするに	6	1176
さらに	12	1287

表 4～10 を見ると、全体の傾向として意味用法内で用例数が最も多い接続詞は合計点数が低い傾向にあることが分かる。また順接や逆接、補足の接続詞では他の意味用法と比較して合計点数が低い接続詞が多く見られた。対して転換、対比の接続詞では合計点数が高い接続詞が多くなっている。

具体的に表を見ていくと、表 4 の順接の接続詞では 10 例中、合計点数が 13 点以上の接続詞は 1 例のみであった。ほとんどが合計点数 9 点以下の接続詞で、合計点数 5 点以下の接続詞は 3 例と他の意味分類と比較して多いことが読み取れる。表 5 の逆接の接続詞も同様に 8 例中合計点数が 13 点以上の接続詞は 2 例のみで、合計点数 5 点以下の接続詞は 4 例と多い。表 9 の補足の接続詞についても合計点数 5 点以下の接続詞はないが、6 例中合計点数が 13 点以上の接続詞は 1 例のみでほとんどが 8 点以下であった。

また合計点数が高い層には用例数の少ない接続詞が、合計点数が低い層には用例数の多い接続詞が多くみられるという傾向があった。

5. 考察

第 4 節の調査結果について具体的な用例を踏まえ、考察を行う。用例中、(F)で囲まれた部分はフィラーを、(D)は言いよどみによる語断片を、| は 200 ミリ秒以上のポーズをそれぞれ表す。なお、用例後の()内には講演 ID、講演種、自発性(評定)、発話スタイル(評定)を示している。

まず合計点数 5 点以下の層の用例を見ていく。合計点数 5 点以下では順接や逆接の接続詞が多いことが第 4 節で明らかとなった。具体的にここでは「それで」「でも」の用例を挙げる。

- (1) それで | これを実は | 図で表わしますと | (F えー) (D (? んねんね)) 一番 (F えー) 成績の良かった第一グループから第十八グループ | それで | 黄色が (F えー) ミニマムバリュー | それで (F えー) ブルーがですね (F えー) 五パーセント点 | それで | (F えー) パープルがですね (F えー) 五十パーセント点 | ということになってこれが平均点 | (F えー) 平均 (F え) 生存日数でこれでもってソートされていると | それで | びっくりするのは

(A07M0554, 学会講演, 自発性が高い(5), ややくだけた(2))

この用例では「それで」が場つなぎ的に複数回使用されている。このように 1 文が長い文章で何度も使用されていることも、合計点数が低い語の用例数が多くなった要因の 1 つであると考えられる。また(1)の用例にはフィラーが多く、実質的な意味を含んだ内容のある語が非常に少ない。ここでの「それで」は国立国語研究所(1955)で述べられていたような、本来の接続詞の役割である文や語を繋ぐ働きを持たず、ほとんど無意味に置かれ、場つなぎ的に用いられている接続詞であると考えられる。

- (2) (F ま)私達だけで | (F あのー) | (D いっ) | 一度は | (F あの)イタリアに行って | (F ま)父がちょっと病気で来れないな | っていうこと話したら | (F ま)大変向こうの家族も心配して | (F あの)(F ま)でも | お父さんを大切にしてくれ | っていうことを | (F ま)父にも | (F あの)申しましたら大変(F ま)喜んでおりました

(S05F0240, 模擬講演, 自発性がやや高い(4), 普通(3))

この用例で「向こうの家族が心配して」いることと「お父さんを大切にしてくれ」と「向こうの家族」が言ったことは逆接の関係ではない。この「でも」も場つなぎ的に使用されている例の1つであると考えられる。

次に合計点数が13点以上の層について考察する。ここでは「すなわち」「なお」の用例を挙げる。

- (3) 法律という普遍的な基準に基づいてでなく | (F えー)世論に(D よっ)基づいて制裁を行なうとベルは分析しています | なぜならば(D ぷっ)ポピュリズムは一般庶民の意志即ち世論を賛美しそれを制裁の正統化の根拠と見なすからです

(A09M0540, 学会, 自発性が低い(1), ややあらたまつた(4))

この用例では「一般庶民の意志」を「世論」と言い換え説明している。合計点数が5点以下の用例と異なり、用例中には実質的な意味を含んだ内容のある語が多く、フィラーが比較的少ないことも特徴として挙げられる。

- (4) 女性の発話ですと | 概ね十五ヘルツ前後が概ね(F えー)一(D ト)一セミトーンに当たります | なお (F え)グラフの横軸は発話開始からの時間ですが | 最終拍の(M す)の音は | 日本人も韓国人も | (F (? あ))全ての発話で母音が無声化してい | ました

(A05M0732, 学会, 自発性が低い(1), くだけた(5))

上の用例では「なお」を使用することによってグラフに関する補足説明を行っている。この用例でも実質的な意味を含んだ内容のある語が多くみられた。

以上の各層別での代表的な用例から、合計点数の低い接続詞はほとんど無意味に置かれ、場つなぎ的に用いられているのに対し、合計点数の高い接続詞には文の展開に関わるような用法で用いられる傾向があることが明らかとなった。

要因として用例の改まり度により使用される接続詞に違いが出ることが考えられる。発話スタイルだけでなく、学会講演は模擬講演よりも改まり度が高いという傾向や、自発性が低く原稿を読み上げる傾向にある講演も改まり度が高くなる傾向があることから、接続詞の選択にはそれぞれの講演の改まり度が関係しているのではないかと推測される。

6. おわりに

本稿では接続詞の文体的特徴についてCSJを用いた調査、考察を行った。まず対象の43語に石黒(2008)を参考とした意味用法の分類を行い、講演種・自発性・発話スタイルといった観点から各接続詞に点数を付与し、その合計点数(15点満点)を算出した。

その結果、合計点数が13点以上、5点以下、その中間という3つの層に分かれ、13点以上の層では偏りがなく多様な意味用法が確認できるのに対し、5点以下の層では順接や逆接の接続詞が多く偏りがあることなど計量的な観点から特徴を明らかにした。

具体的な用例を見ていくと、合計点数が5点以下の層では国立国語研究所(1955)で述べられていたような、本来の接続詞の役割である文や語を繋ぐ働きを持たず、ほとんど無意味に置かれ、場つなぎ的に用いられている接続詞が多数確認できるのに対し、合計点数が13

点以上の層では文の展開に関わるような用法で接続詞が用いられる傾向があることが明らかとなった。

発話スタイルだけでなく、講演種や自発性の低さによっても改まり度に違いがあるため、様々な要因による改まり度が接続詞の選択に関わっている可能性がある。しかし本稿では詳細な要因についての分析は行わなかった。また、場つなぎ的に使用されている接続詞は、文の展開に関わる用法で使用されている接続詞と用法が異なるので、更なる意味用法の分類の検討が必要であると考えられる。今後の課題としたい。

参考文献

- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』, 光文社.
- 石黒圭(2016)「社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性——分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係——」, 庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己(編)『日本語文法研究のフロンティア』, くろしお出版, pp.161-182.
- 国立国語研究所(1955)『国立国語研究所報告 8 談話語の実態』, 秀英出版.
- 国立国語研究所(2006)『国立国語研究所報告 124 日本語話し言葉コーパスの構築法』, 国立国語研究所.
- 田中章夫(2001)『近代日本語の文法と表現』, 明治書院.
- 日本国語大辞典 第二版 編集委員会(2002)『日本国語大辞典』 第二版, 小学館.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二他 (2012)『新明解国語辞典』 第七版, 三省堂.